

奈良県立医科大学 学報



平成23年仕事始め式にて

January
2011

vol. 35

CONTENTS

新年挨拶	1
叙勲受章者のお知らせ/早稲田大学との連携	2
医学科学外研修/医学科学学生生活部会/看護学科保健福祉行政論演習	3
日本学生支援機構優秀学生大賞を受賞	4
白檀生祭開催報告	
クラブ紹介(写真部・ゴルフ部)	5
木村教授らがFukuchi Awardを受賞	6
同志社女子大学との合同シンポジウム開催報告 図書館だより	7
電子ジャーナルバックファイル/機関リポジトリ・ワークショップ開催報告 FD研修会開催/チェンマイ大学看護学部学生訪問/授業料減免制度	8
産学官連携だより	9~11
イノベーションジャパン2010参加報告/UNITT2010参加報告	12
中島佐一学術研究奨励賞の募集 外部資金獲得状況	13~15
附属病院から 小児センター設立/乳腺外来/外来エレベータ設置	16
看護部から 認定看護師紹介	17
病院教授称号付与/医学教育等関係業務功労者表彰/「共催」制度新設	18
臨床研修医マッチング結果 レポート(役員会及び教育研究審議会からの報告)/公開講座開催案内	19
メディア掲載情報/下ツ道/広告	20

新年のご挨拶

学長 吉岡 章

明けましておめでとうございます。

2004年度からの新臨床研修制度の導入に端を発しました医師の「地域別・診療科別偏在」の顕著化は、本県、本学にも深刻な影を落としました。ここ2~3年、本学附属病院の初期研修医と後期研修医(いわゆる入局者)数には、ようやく改善の曙光が見えて参りましたものの、未だ十分ではありません。このような状況の中、民主党政権は、医学部・医科大学の新設を目論んでいます。OECD30カ国中27位の医師数(2008年末の人口10万人対224.5人)を平均値(同310人)まで引き上げるためというのがその根拠のようですが、全く理論的にも現実的にも無意味であるばかりか、「医師過剰」という将来への大きな禍根を残す結果となることは明々白々であります。

全国医学部長病院長会議は、以下のような明快な試算を添えて文部科学省と厚生労働省に対し、新設に慎重な対応を求める意見書を数回にわたり提出し、反対の立場から行動を行っています。2010年度の医学部入学定員は8,846名と、すでに2007年度より1,221名増え、これは一気に12~13大学を新設したことと同じです。現在、毎年約8,000名の新医師が誕生し、死亡など医籍から抜ける数は約3,500名で、純増は約4,400名です。従って、現定員8,846名で推移すると、2030年には医師数はOECDの平均値を超えて約320名となり、その後も増え続け、2050年には400名超の大幅な過剰供給となります。2020年以降増員前の定員に戻したとしても、やや鈍化するだけであり、定員を1大学50名に半減してやっと300名に留まるのです。

このように数を見ただけでも極めて危険な将来となります。元来、国民が医科大学に求めているのは単なる数ではなく、有能な医師の養成であります。それには学生数に見合う教員増も必要で、基礎医学者は払拭し続け、臨床系も地域中核病院の優秀な勤務医が引き抜かれることとなります。その結果、医師養成増のつもりが更なる「医師養成崩壊」を招くこととなります。

本学では強い社会要請に応じて、10年間の期限付きで113名へと増員しましたが、うち13名は一定の条件の下に県からの奨学金を受給します。その学生のための魅力的なカリキュラムとキャリアパスは教育開発センター(藤本眞一教授)と新設の地域医療学講座(松村雅彦教授)を中心に設定、準備中で、2011年度に発足する県の「地域医療総合支援センター(仮称)」が地域への医師の適正な配置に関する協議と調整を図って行くこととなります。

年頭に当たり、今、本学が真に求められている地域医療へのさらなる貢献が、徐々にではあっても着実に前進し、花開くよう、全教授、全教職員と学生、研修医諸君に絶大な理解と協力を要請するものであります。

～心からお祝い申し上げます～ 叙勲受章者のお知らせ

叙勲は、国家又は公共のために功労のあった方を対象に授与されています。平成22年中の本学関係の受章者は、以下の方々です。

春 瑞宝中綬章
神谷 知彌氏(名誉教授)

秋 瑞宝中綬章
榎 泰義氏(名誉教授)

※毎年、春は4月29日、秋は11月3日に発令されます。

(教育開発センター)

早稲田大学との連携

本学第3学年「医学・医療概論」の講義に早稲田大学人文系の教員の方々の協力を頂きました。

教育開発センターでは、早稲田大学との学術提携事業の一環として、本年度の「医学・医療概論」の講義について、早稲田大学から医学・医療に関する倫理、法律、経済などを専攻する人文系の教員を招聘して、講義を組み立てました。それらの先生方の講義後に少人数グループ学習を実施し、最後に学習成果の発表会という日程で無事に終了しました。今回、大変お忙しい所、早稲田大学から本学の講義にご参加頂いた先生方から、講義の内容について要約、感想などを頂きました。

以下に3人の先生方のコメントを掲載します。なお、河原直人先生は、昨年12月1日から本学の非常勤講師にも就任頂いております。(教育開発センター 教授 藤本真一)



早稲田大学政治経済学術院 教授 須賀晃一先生(専攻:公共経済学)
講義タイトル「経済学の考え方:市場の成功と失敗」

経済学の観点から医療を考える際に重要となるポイントを、市場の成功と失敗の観点から紹介した。(1) 医療サービスの財としての性質(正の外部性を伴う財、価値財)、(2) 医療制度は全体として公共財的性質を持つこと、(3) 医療の提供は市場では不十分になること(市場の失敗)、(4) 政府による適切な医療の提供が必要不可欠であること、にまとめた。さらに、(5) 政府が供給するさまざまな公共財や価値財の中で医療にどれだけ支出するかは政治的決定の問題であり、国民の価値判断に基づくことを述べて講義を終えた。



早稲田大学総合研究機構GCS研究所 主任研究員、早稲田大学大学院准教授
奈良県立医科大学非常勤講師、神戸大学大学院医学研究科客員准教授 河原 直人先生
(専攻:医療倫理学)
講義タイトル「地域医療倫理」

「地域医療」と「医療倫理」の接するところに重要な課題は多くある。今回は具体的な話題として高齢者医療を取り上げ、地域の医療・福祉の連携と倫理的課題について受講生と共に考えてみた。今後も臨床・制度・理念の諸相から具体的問題解決のあり方を探求しつつ、地域の医師の新たなプロフェッショナリズムと、そこに集う人々の生病死をめぐる医療倫理について学生と共に考え、「医」からの地域再生の実現に貢献していければと願っている。



早稲田大学 社会科学部 専任講師 横野 恵先生(専攻:医事法)
講義タイトル「医事法制度」

10月7日に医学・医療概論の講義を担当させていただいた早稲田大学の横野です。この科目は、奈良県立医科大学と早稲田大学との協力事業の一環として、両大学の教員が共同で担当しました。

私が担当した回では、医師法やインフォームド・コンセントの法理など、医療に関わる基本的な法律問題を扱いました。初めてのことで戸惑いもありましたが、熱心な学生さんが多く助けられました。帰路の関係で質問に対応する時間が十分に取れなかったのが心残りではありますが、今後も何らかの形で皆さんにお会いできればと思っています。

大自然に抱かれて～医学科1年生「学外研修」～

昨年11月24日(水)、一般教育教員引率のもと、医学科1年生112名が奈良県立野外活動センター(奈良市都祁町吐山)に出かけて1日の研修を行いました。

当日は、陽ざしはあるものの肌寒い日和でした。しかし、熱い鉄板でグループごとに焼きそばや肉・野菜などをワイワイ、ガヤガヤと焼いていると、そんな寒さもどこへやら。また、薪から火をおこすことや、準備、片付けなど、すべての作業が日常を離れて新鮮な様子でした。

食後はセンター指導員のリードで、ゲーム感覚でコミュニケーション術を学んだのち、センターを後にしました。自然に抱かれて協働作業をすると心も素直になり、同級生としての仲間意識も育ちます。これからの勉学、実習などにおける切磋琢磨の下地となることを期待します。



ボランティア・市民活動へのすすめ ～学生生活部会講演会～



昨年11月24日(水)、学生生活部会主催で講演会を開催しました。「ボランティア・市民活動へのすすめ」と題して、講師は本学法人企画部の森川部長がつとめました。同部長は現職就任前に奈良県くらし創造部協働推進課長を務め、県内のボランティア・NPO活動の推進に携わってこられました。そのため、こうした運動に造詣が深く、また、地域コミュニティ活動の促進や地域の教育力向上などについての経験も豊富です。

当日は吉岡学長をはじめ、学生、教職員が熱心に聴講し、様々な視点からの最新の情報にふれるとともに、医療において「連携」と「協働」がいかに重要であるかについての認識を深めました。また、学長からは附属病院小児センターでのボランティア活動例が紹介されました。

医師、看護師をはじめ、医療職を志す者にとって、連携、協働の精神を培うことは非常に大切なことです。個人的にクラブや各種団体を通してこのようなボランティア活動・市民活動に取り組む学生さんも多いでしょうが、今回の講演会が次へのステップになればと思います。

(看護学科)

県内自治体とタイアップ～保健福祉行政論演習～



森下檀原市長

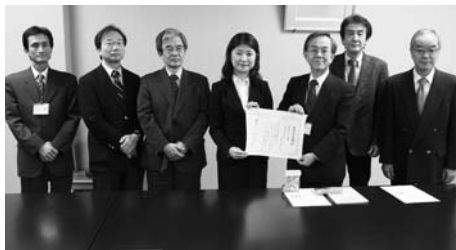


看護学科2年生77名が、県内各自治体の基本政策等を学ぶため、昨年11月2日に大和高田市、天理市、檀原市、宇陀市、斑鳩町を訪問し、市長や職員の方々からお話を伺いました。

看護学科学生の多くは、国家試験を突破して、看護師、保健師として活躍することを目標に学んでいます。中でも地域看護は、「地域で生活している人々を健康の側面から支援していく」活動です。そのためには、それに関連する要因を理解し、医療の視点に加えて、社会、福祉、生活等、幅広い面から考察する必要があります。また、一歩踏み込んで、どのような条件や環境整備が必要であるかなど、健康が、各自治体の政策や事業とどのような関係を持つのかということを実地の方々と一緒に検証してきました。

おめでとう 寺島千晶さん(医学科6年生)

～日本学生支援機構「優秀学生顕彰」で大賞を受賞～



寺島千晶さん(医学科6年生)が独立行政法人日本学生支援機構の優秀学生顕彰事業社会貢献部門で大賞を受賞しました。これは本学が彼女の活動を同機構へ推薦したことによるものですが、この部門には全国から20件もの推薦があり、その中から彼女は大賞2名のうちの1名に選ばれました。

寺島さんは3年前に、本学の医学・看護学教育に役立つ資料として、附属図書館での闘病記文庫の設置を発案し、他大学での事例や同文庫設置のガイドラインなどを提供してくれました。その後、図書館長や図書委員会の承認を経て、同文庫が設置されることとなりました。また、市中病院への闘病記文庫設置、国際会議での同文庫及び日本のハンセン病に関する発表、禁煙トリビアコンペティション運営、世界たばこ関連疾患予防学会での通訳などに

も幅広く貢献し、これらが高く評価されて、今回の受賞へとつながりました。

昨年12月11日には、吉岡学長も列席して、東京で表彰式があり、寺島さんには表彰状と奨励金50万円が授与されました。引き続き、同月21日には、学長室において受賞報告会が行われました。これには、平尾附属図書館長、喜多医学部長、吉岡学長、古家臨床教育部長、藤本教育開発センター教授、附属図書館鈴木係長(写真右から)らも出席し、彼女の栄誉を祝しました。

今回のことで、昨年度の奨励賞に続き、本学から2年連続で受賞者が出ることになりました。これを本学の新たな伝統の魁として、多くの学生さんが後に続いてくれることを期待します。

<http://www.jasso.go.jp/kensyo/h22kekka.html>

寺島さんコメント

この度、社会貢献部門で大賞をいただくことができましたことを大変嬉しく思います。

私は学内での部活動以外にも、様々な学外活動に携わってきました。学生として、自分にできることを一つでも成し遂げたいと思い活動をしていくなかで、いつも親身に相談に乗ってくださり、暖かく見守ってくださった大学の先生方や、支えてくださった全ての方々に深く感謝しております。

素晴らしい活動や研究を頑張っている後輩のみなさんが、来年度以降も、社会貢献部門、また学術部門において受賞されることを願っています。本当にありがとうございました。

今後とも、どうぞよろしくお願い申し上げます。

輝かしい未来へ
飛び立とう!

医大白檀生祭(かしふさい)

(平成22年度白檀生祭実行委員会一同)

今年度も10月30、31日という爽やかな時期に白檀生祭を開催することができました。台風接近に伴い中止も懸念されましたが、私たちの強い思いが天に届いたのか、予定どおり終了することができました。

今年度のテーマは「飛翔」です。これは、奈良県が平城京遷都1300年祭を機にさらなる発展を遂げようとするのとともに、私たちが輝かしい未来へ飛び立っていこうという思いを込めたものでした。

具体的には次のような催しを行うとともに、シンポジウムでは初めての試みとして学生参加型の討論会も行い、たくさんの方に参加いただきました。また、NHKには企画段階からシンポジウム当日の様々まで取材してもらい、主催者としての意図を広くPRすることができました。

①シンポジウム

演題：人と人とのつながり

講師：NPO法人人口シナントス理事長 川原尚行先生
(川原先生による講演会、学生発表、討論会)

②講演会

演題：クモの糸のミステリー

講師：本学化学教室教授 大崎茂芳先生
(昨年大好評であったクモの糸の巻き取り体験や強度実験。
今年はクモの糸でできた弦を使用したバイオリンの演奏も。)

③展示

内容：からだのしくみ展

協力：第一解剖学教室
(様々な模型や、実物の骨の展示)

④CPR体験(人形を使った心肺蘇生法の体験)

目標：CPR(CardioPulmonary Resuscitation)についての知識を深める

担当：看護学科 学祭委員

⑤チャリティーバザー

内容：大学内で出品を募ったバザー

(売り上げを赤十字に寄附し、ケニア地域保健強化事業の支援金として役立ててもらうことを目標に、総額83,005円を売り上げ、大成功!)

その他、「忍成修吾氏トークショー」や「平井喜美ライブ」などには、学外からも多くの方々にご来場いただきました。今回、準備から片づけに至るまで、学祭委員が丸となり協力し合えたことで、改めて仲間の大切さを実感しましたし、また貴重な経験となりました。この白檀生祭が一生の思い出となるのはもちろんのこと、今後の人生においてきっと何らかの形で役に立つものになると確信しています。

最後になりましたが、協力していただいた関係各位、ならびにアドバイスを下さった諸先輩方にこの場を借りて御礼申し上げます。来年以降もよろしくお願い致します。



本学の学生は、勉強だけをしているわけではありません。

多くの学生は、文化系12部、体育系24部のうちのいずれかのクラブに所属しています。そして、心身を鍛え、交友を深め、青春を謳歌しています。

さて第3回のクラブ紹介は、写真部とゴルフ部です。



写真部

「行雲流水」

部 員:20名

顧 問:浅田 秀夫(皮膚科学教授)

主 将:白 隆英(4年)

活動内容:風景の撮影など

練 習 日:不定期

活動については、撮影会が主体で、あらかじめ決まった計画があるわけではありません。しかしながら、我が部は、他の部と違い自分のからだにカメラさえあればOKです。また個人で旅行に出かけたときに、行く先々で風景を撮ることなども立派な活動の一つだと思います。もしカメラを持ち合わせていなくても、今では携帯電話のレンズでも十分鑑賞に耐える作品を撮ることができます。

一点の執着なく、物に応じ事に従う。こんな心持ちになってみたいという方は、私たちの輪に加わってみませんか。美しい風景写真はイヤなこと辛いこともすべて洗い流してくれる魔法の力をもっています。一緒に思い出をつくりましょう。



ゴルフ部

「小さなボールを大きくショット」

部 員:46名

顧 問:岸本 年史(精神医学教授)

主 将:佐原 利典(3年)

活動内容:ゴルフ

練 習 日:毎週月曜日と木曜日の午後5時～

我が部は、毎週月曜日と木曜日の放課後、檀原ゴルフセンターを拠点に練習しています。

医学科、看護科合わせて46名と大所帯ですが、一人ひとりがキャラの立った個性派集団です。皆自分の目標とするスコア突破に向けて日々精進しています。

試合は西医体、西日本医歯薬戦、関西国公立戦、大阪大学・滋賀医大との交流戦などがあって、個人戦・団体戦ともに常時入賞が大きな目標です。

ゴルフは生涯を通してできるし、フェアプレイの精神や協調性も身に付く素晴らしいスポーツです。最初からコースに引っ張って行って「さあ打ってみろ」なんて野暮は言いません。「ちょっとクラブを握ってみようかな」という方は近くのゴルフ部員に声を掛けてください。

木村教授らが「Fukuchi Award」を受賞! ～アジア太平洋呼吸器学会にて～



表彰状を受ける木村教授（左）

本学内科学第二講座 木村弘教授、玉置伸二助教らの研究論文「Nocturnal hypoxic stress activates invasive ability of monocytes in patients with obstructive sleep apnea syndrome (閉塞型睡眠時無呼吸症候群患者においては、夜間の低酸素ストレスにより単球の活動性は亢進する)」が、アジア太平洋呼吸器学会 (APSR : Asia Pacific Society of Respiriology) の第1回最優秀論文賞「Fukuchi Award」を受賞しました。

「Fukuchi Award」は、APSRが今年創設した賞で、過去1年間にAPSR発行のジャーナル誌「Respirology」に掲載された研究論文の中から、最も優秀な研究論文に対して授与されるもので、これまでの研究成果

をも加味して選出されたものです。なお、同賞の名称である「Fukuchi Award」は、APSRの発展やRespirologyの発刊に貢献された順天堂大学客員教授で元日本呼吸器学会理事長の福地義之助氏にちなんで命名されました。

木村教授コメント

本研究は、私ども第二内科が継続して行ってきた「睡眠時の低酸素ストレスの全身作用」に関するものです。低酸素ストレスが全身性炎症を引き起こす要因であり、その機序として、睡眠中の間断的低酸素が単球およびマクロファージの遊走能と湿潤能を亢進させ、結果として、動脈硬化、心血管障害につながることを証明しました。また、この遊走能・湿潤能の亢進はCPAPという睡眠時無呼吸の患者さんに対する治療にて短時間にて改善することも明らかになりました。玉置助教をはじめとする、第二内科の多くの教員が総力で積み上げてきた研究成果の一端であり、臨床の合間の限られた時間を割いて継続してきた研究が、思いがけなくも世界レベルで評価されたことにとても嬉しく思います。素晴らしい教員仲間たち、またご協力いただいた患者さん、臨床研究の機会を与えて下さった奈良県立医科大学、そして多くの関係者の皆様に感謝いたします。

奈良県立医科大学・同志社女子大学 学術交流に関する包括協定に基づくシンポジウム

第4回
シンポジウム

「大和の医と薬の1300年」を開催しました!

～平城遷都1300年祭記念～



吉岡学長あいさつ

平成22年12月4日(土)、本学と同志社女子大学との共催によるシンポジウムを本学大講堂において開催しました。

今回は平城遷都1300年祭記念として開催し、「大和の医と薬の1300年」をテーマに、奈良県保健環境研究センター榮井毅主任研究員に「古(いにしえ)の奈良と薬の所縁(ゆかり)」(座長:本学附属病院谷奥参与)、同志社女子大学薬学部小西天二教授に「現代に生きる正倉院薬物」(座長:同志社女子大学表象文化学部本間教授)、本学麻酔科学古家仁教授に「痛みと漢方」(座長:本学薬理学吉栖教授)と題して、それぞれ講演願いました。

講演では、仏教の慈悲の心による民衆の救済を目的に、光明皇后が施薬院・悲田院を建てられたこと、正倉院に収蔵されて

いる中国から伝わった生薬のこと、現在の医療でも痛みの治療や麻酔に漢方薬が使用されていることなどが解りやすく解説され、平城遷都1300年の歴史と、それ以前に都の置かれたここ橿原の地での医と薬の歴史に触れ、健康と長寿を願う人の心に今も昔も変わり無く、その心が今日における医療の発展に結びついていることを実感いたしました。また来場者の質問からも、その関心の高さが伺えました。

図書館だより

創刊号から見られるようになりました

～電子ジャーナルバックファイルのご紹介～

情報技術の発展とともに、学術雑誌の主流はプリント版からオンライン版へと移行してきました。この流れの中、出版各社はオンライン版のバックファイルの提供を始めました。今では創刊号にまでさかのぼって、その多くが1回限りの買取方式で購入することができるようになってきています。

本学でも、ここ2～3年の円高の影響によって、電子ジャーナルの購読予算に多少の余裕が生じたので、リスクの少ない買取式のバックファイルをいくつか購入しました。

購入品の選定にあたっては、期間限定の特別割引価格のものや、当館の書庫に占める割合が高くかつアクセス数が多いものを中心にしました。この購入により、製本雑誌の現物を処分することができ、特に狭かった洋雑誌のスペースが広がりつつあります。

各教室におかれても、別表のバックファイルにある製本雑誌を処分される場合は当館にご相談ください。

担当：大瀬戸（内線2292）、鈴木（内線2293）

電子ジャーナル・バックファイル購入一覧

(別表)

導入年度	バックファイル・タイトル	出版社	導入年度	バックファイル・タイトル	出版社
2009	Springer Online Journal Archive (STM系783誌)	Springer-Verlag	2010	American Journal of Surgical Pathology / Anesthesia & Analgesia / Anesthesiology / Annals of Surgery / Critical Care Medicine / Journal of Neuropathology & Experimental Neurology / Neurology / Neurosurgery / Obstetrics & Gynecology / Plastic and Reconstructive Surgery / Spine / Transplantation	LWW
	American Journal of Physiology 全セクション	American Physiological Society		International Journal of Cancer	John Wiley & Sons
	Journal of Clinical Oncology	American Society of Clinical Oncology		JAMA & 9Archives	American Medical Association
	American Journal of Psychiatry ほか	American Psychiatric Association		Science	AAAS
2010	Radiology	Radiological Society of North America	2011	Histopathology/Hepatology	John Wiley & Sons

リポジトリで地域から医学・医療情報を発信しよう!

～機関リポジトリ・ワークショップ開催～

前号で紹介しました「機関リポジトリ・ワークショップ」を昨年11月4日、厳櫃会館で開催しました。

今回のテーマは「リポジトリで地域から医学・医療情報を発信しよう」というもので、ねらいは二つありました。

一つは、学内の皆さんに広く機関リポジトリ事業やオープン・アクセスについて知ってもらおうというものです。これについては、冒頭の基調講演により正しい理解を得ていただいたものと思います。

二つには、本学が奈良県の医学・医療情報発信の中核となるべく、共同リポジトリを構築したうえで、県内医療機関から情報を収集・蓄積し、公開する可能性を探ることです。そのためパネルディスカッションでは、「病院勤務医は情報発信や受信についてどう考えているのか」、「大学間の共同リポジトリはどうあるべきか」、「患者はどういう情報を求めているか」などに関する事例を報告してもらいました。これを受けた会場との意見交換の中で、県内医療機関が発行する紀要などを本学に集約し、共同リポジトリを構築して全世界へ発信する意義は大きいという感触を得ることができました。

また、平尾図書館長（写真左）から本学機関リポジトリGINMUの現状と課題について、藤田基礎看護学教授（写真右）から看護師・看護学生の情報検索の実態やWebサイトにおけるユーザビリティの重要性などについて話がありました。

このワークショップの成果を今後のリポジトリ事業へしっかりと反映させていこうと図書館職員一同、決意を新たにしました。



ストップザハラスメント ～教職員対象のFD研修会を開催～

昨年11月17日(水)、FD(Faculty Development)委員会の主催により、教職員を対象に「ハラスメントの発生予防」をテーマとした研修会を実施しました。

当日は、本学前監事の石黒弁護士(写真左)から「法律家から見たハラスメント」と題して、主としてパワー・ハラスメントやセクシュアル・ハラスメントの裁判上の問題点、法的責任等について、弁護士活動を通じた具体的な実例を盛り込んだ講演が行われました。

また、「NPO法人アカデミック・ハラスメントをなくすネットワーク」代表理事として活動されている健康政策医学の御輿講師(写真右)から、「アカデミック・ハラスメント発生予防について」と題して、実践活動を通じて得た具体的な事例をもとに講演が行われました。

いずれも具体的で分かりやすい解説に、吉岡学長はじめ多数の教職員が熱心に聴講し、個人の人格と尊厳を侵害するハラスメントの防止の必要性について、認識を深めました。



精神医療センターを見学 ～チェンマイ大学看護学部大学院生が来学～

昨年12月3日(金)に本学が学術交流協定を結んでいるチェンマイ大学の看護学部から約40名の大学院学生と引率の教員が来学し、臨床現場「附属病院精神医療センター」の見学が行われました。

朝9時から、吉岡学長や飯田看護学科長ら看護学科教員の歓迎を受け、森川精神科病棟看護師長のオリエンテーションの後、附属病院精神医療センターの見学、見学後の質問とディスカッションと、午前中に設定されたスケジュールが終了しました。

当日は、あいにくの悪天候でしたが、チェンマイ大学生の笑顔が嵐を吹き飛ばしてくれました。



授業料減免制度創設 ～平成23年度からスタート～

経済的な理由により修学を維持することが困難な学生を支援する制度の創設は、本学の課題の一つでありましたが、平成23年度から授業料の減免制度をスタートすることとなりました。

経済的な理由により授業料の納付が困難で、かつ、学業優秀な学生の修学を支援する趣旨から、学資負担者について生活保護受給者や市町村民税所得割非課税等の要件や、在学生については所定の必須科目をすべて履修している等の要件を設定しており、経済的な要件に応じて、授業料の全額又は半額を免除することとしています。

現在、事務的な準備を進めており、今後ホームページや学内掲示等でお知らせする予定です。

産学官連携だより

ここにご注意! 産学官連携 ~リスク管理の視点から~



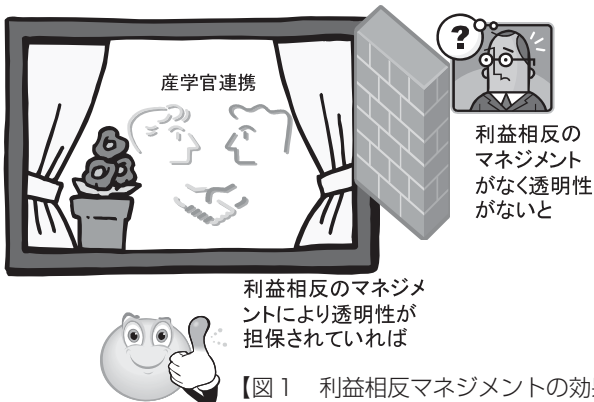
研究推進課では、昨年度より大学知的財産アドバイザーとして(独)工業所有権情報・研修館から金崎参与の派遣を受け、ご指導を受けながら産学官連携活動に取り組み、今年度は関西TLO(株)に知財マネジメント業務を委託した効果もあって、昨年度2件であった発明等に関する出願件数が、今年度は11月末現在で出願済みが4件、出願準備中が1件と倍増しています(表1)。企業に技術移転を行い、産学官連携をととして社会貢献を推進するには、大学が保有する技術を知的財産権として権利確保した上でないと、企業としては事業活動の目的が立たないので産学官連携に積極的になれません。出願件数の伸びからも、産学官連携活動が活発化していると言えます。

表1	奈良医大における発明等の出願件数の推移								
	H22年11月末現在								
年度	14	15	16	17	18	19	20	21	22
出願件数	1	3	2	0	1	2	2	2	4

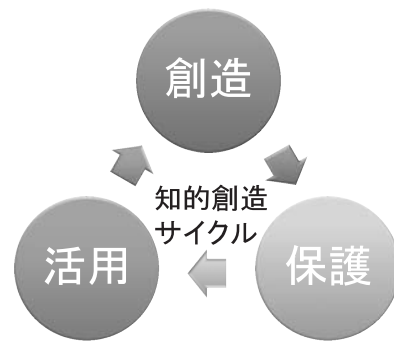
教職員の皆様には、日常の業務にお忙しいところ色々な場面で産学官連携の取り組みにご協力いただき、感謝申し上げます。今回は、産学官連携が進展していく時、注意しておくべき事柄を述べたいと思います。

1. 利益相反について

大学が営利を目的とする企業と連携する場合には、利益相反の問題が生じる可能性があります。しかし、利益相反の問題があるから産学官連携を行わないと技術移転は進まず、大学の第3の使命と言われる社会貢献の機会を逃すことにもなり、日本社会全体にとってもマイナスです。そこで、利益相反のリスクを適切にマネジメントすることが必要となります。本学の場合は、昨年度制定した利益相反管理規程に基づく産学官連携面のマネジメントを実施しています。また、医学部の特性としてヒト対象の臨床研究における倫理面のマネジメントが求められており、本学では、「医の倫理委員会」、「ヒトゲノム・遺伝子解析研究倫理審査委員会」及び「病院臨床研究審査委員会」が分担して倫理面でのマネジメントを行っています。現在、「利益相反」と「倫理」が独立してマネジメントする体制となっていますが、タミフルの事案のような問題が発覚した場合、現在の奈良医大の体制では不十分ではないかと批判を受ける可能性は否定できないと考えられます。例えば、本学の研究者が世界的にインパクトのある成果を上げた場合、その成果が、ある製薬会社が特許権を有する医薬品の新たな効果であって、その企業から研究者が奨学寄附金を受けていることが明らかになると、本学の制度に従って利益相反、倫理のマネジメントを行っていたとしても、臨床研究そのものに対して世間から奨学寄附金を受けた企業の利益誘導の研究成果ではないか? ネガティブな結果が意図的に隠蔽されているのではないか? データそのものが捏造されているのではないか? といった**疑念**を抱かれてしまい、素晴らしい成果を上げているにもかかわらず、研究者が疑念に基づく根拠のない無責任な批判に晒されることも考えられます。利益相反は事実の有無よりも外部からの疑念の有無によりその問題が発覚することが多いと言われています(図1)。本学においても、ヒト対象の臨床研究が「倫理+利益相反」で連携してマネジメントされ、世間の無責任な批判から研究に携わる者をプロテクト可能な体制へと改良していくことが必要ではないでしょうか。利益相反マネジメントは個人のプライバシーにも関わる非常にデリケートな問題で、事務手続きも煩雑となり時間的・金銭的コストを要しますが、研究者を世間の批判から守るために必要な制度です。その運用には、教職員皆様のご理解とご協力が不可欠です。(12頁UNITT2010参加報告参照)



【図1 利益相反マネジメントの効果】



【図2 知的創造サイクル】

(※参考文献: 文部科学省「臨床研究の利益相反ポリシー策定に関するガイドライン」平成18年3月
厚生労働省「厚生労働科学研究における利益相反 (Conflict of Interest: COI) の管理に関する指針」平成20年3月31日科発第0331001号厚生科学課長決定)

2. 侵害対策について

特許をはじめとする知的財産権に関する仕組みは、人間の知的な創造活動により生み出された成果を権利として保護し、その利用を図ることにより新たな創造を促し、産業の発達に役立てようとするものです（図2）。

自己の成果をこの仕組みにより保護すると同時に他者の成果も同様に取り扱われなければフェアとは言えず、仕組みは成り立たなくなります。大学における教育・研究活動においても他者の成果の侵害について注意する必要があります。例えば、他者の研究成果や共同研究による成果を自身の成果として発表あるいは特許出願してしまうと、真の研究者がその成果を発表する権利あるいは真の発明者としての権利を侵害していると言えます。また、特許発明それ自体を試験・研究の対象としていれば、特許権の侵害とはなりません。特許権のある特異な遺伝子を持つ実験動物を使用して新しい治療方法の効果を試験する場合に、その実験動物を購入すると高価であるため特許権者からライセンスを受けることなく自身で遺伝子組み換えを行って作成・実験していたとすれば、その実験動物の特許権者から特許権侵害で訴えられることになります。大学における試験・研究においても自己の権利が侵害されていないか、他者の権利を侵害していないか常に目配りをして研究者自身が自己点検する心掛けが必要です。

3. 情報管理について

知的な創造活動により生み出された成果は、言葉・文字・数値として表現、記録されます。これらは紙媒体であれ、電子媒体であれ、成果を生み出した人の頭脳の中であれ、「情報」と言えます。情報は形がないので「無体物」と言われたりします。情報は無体物であるがゆえにその管理が難しく、尖閣諸島沖での衝突事件映像の例にあるように、ひとたび流失した情報は取り返しがつきません。産学官連携においては、情報を的確に管理し、権利化し、論文や特許技術として公開し、社会貢献に役立てるという姿勢が必要です。企業は自己の営利を生み出すために事業に役立つ有用な情報を集めるために必死です。本学の研究者が持っておられる最先端の知見情報を悪質な企業に盗用され、その企業の特許として出願されないように大学及び個々の研究者ご自身が自己管理しなければなりません。外部に対して秘密として取り扱う情報は、その情報に秘密であることを示すマーク（例：**秘**、CONFIDENTIAL等）をしるして不特定多数の人が自由に閲覧できない状態で保管する、電子情報はパスワードを設定して不特定多数の人間がその情報に制限なくアクセスできないようにプロテクトしておく等の対策を施しておかないと秘密情報として管理していたとは言えず、法律（不正競争防止法）による保護を受けることもできません（図3）。

また、外部の機関から秘密情報として提供された情報が、本学の秘密情報としての管理不備により流失してしまい提供機関に損害を与えた場合、本学が損害賠償を請求される事態も想定されます。しかし、秘密情報としての的確に管理されていた情報は、たとえその情報が盗用されたとしても法律上の保護を受けることができ、盗用した相手方に対してその損害賠償を請求できることになるので秘密情報の管理は非常に重要です。



【図3 秘密情報管理イメージ】



【図4 成果発表の前に出願を】

4. 発信管理について

情報管理の関連ですが、情報を発信する場合も適切な管理が必要です。大学等の研究機関では、その成果を論文発表という形で社会に発信・還元することも使命の一つです。しかし、知的財産権として権利化可能な成果である場合は、出願する前に論文発表などを通じて公にしてしまうと、知的財産権の制度上、その権利を確保できなくなるので注意が必要です。論文発表以外には、大学内外の研究会での報告、研究資金の公募申請、成果報告、マスコミの取材、産学官連携のためのシーズ情報提供等、情報を提供する相手方に守秘義務を課さない情報提供及びインターネット回線を通じてのアップロードは公知として取り扱われるので適切な管理が求められます（図4）。

5. 安全保障貿易管理について

世界各地では米国の9.11テロ事件をはじめとするテロ行為や、北朝鮮による核開発問題といった世界の平和・安全を脅かす問題が存在しています。日本を含めた先進国のもっている高度な機械や技術が、平和・安全を脅かす国家やテロ組織に渡ってしまうと国際的な脅威となります。これを未然に防ぐために国際社会では、貿易管理に取り組んでおり、「安全保障貿易管理」と言われています。“貿易”とついているので初めて聞かれる方は、物を外国に売買で輸出しなければ対象とならないと思われるかもしれませんが、この場合の貿易には、物の国外への移動、情報の国内居住者以外への提供も含まれます。本学の場合では、MTAとしての提供、電子メールによる国外研究者へ情報提供、留学生への技術指導等が対象となると考えられ、提供するMTA・情報・技術が「安全保障貿易管理」上、問題がないかをまずは研究者自身がチェックしていただく必要があります。国際貢献、研究発展の為に国外との交流は欠かせません。安全保障貿易管理の問題に過剰に反応して国際交流が委縮してしまうことは本学にとってもマイナスです。しかし、これは国際問題ともなりかねない案件です。「テロ組織が使用した生物兵器が、奈良医大の研究者からの技術情報により開発された。」 などといった事態が発生しないように適切に管理することが必要です(図5)。



【図5 安全保障貿易管理イメージ】



生物多様性条約の目的

- ・多様生物性の保全
- ・生物多様性の構成要素の持続可能な利用
- ・遺伝資源の利用から生ずる利益の公正かつ衡平な配分

【図6 生物多様性条約の目的】

6. COP10対応について

皆さんの記憶にも新しいと思いますが、昨年10月に名古屋市で、生物多様性条約締結国会議（COP10）が開催されました。遺伝資源の利益配分を巡って、遺伝資源利用国である先進国側と遺伝資源提供国側である開発途上国側の激しい綱引きが展開され、一時は交渉の決裂も危惧されましたが、議長国である日本政府の努力も功を奏して名古屋議定書が採択されました。主な内容は「①遺伝資源や伝統知識の利用及びその継続的な利用によって生じた利益を配分、派生物については個別に対応②病原体などの緊急時は適切に配慮③利用国は提供国の法規制に従って事前合意や商的契約が行われているかを確認するチェックポイントを設置」となっています。大学における研究活動も例外ではなく、今後、他国の遺伝資源を直接あるいは間接的に利用している場合、研究の管理を適切に行うことにより遺伝資源を適切に管理し、その成果による利益配分も適切に行う取り組みが求められることが予想されます。今後の動向に注意が必要です(図6)。

以上に述べた事柄は、顕在化しなければ意識されることは少なく、その対策も重要視されないという特性を持っていますが、大学のマネジメントとして大変重要で、問題が顕在化してしまうと大学組織全体の信用が失墜し、その影響は当事者だけでなく本学に所属する全ての教職員に及ぶものと考えられます。個々の教職員レベルにおいてリスク管理として常に意識していただきたい事柄です。



BioJapan2010 World Business Forum

参加報告

9/29(水)～10/1(金)の日程でイノベーションジャパン2010(於:東京国際フォーラム、主催:JST)、Bio Japan2010(於:パシフィコ横浜、主催:バイオジャパン組織委員会)がそれぞれ開催され、本学から小西研究部長と池谷研究推進課長が参加・情報収集してまいりました。

イノベーションジャパンは、国内大学の最先端技術シーズと産業界のマッチングイベント(大学見本市)で、今年で7回目になります。大学、大学共同利用機関法人、高等専門学校の研究成果が400件、企業、大学発ベンチャー、独立行政法人等を含めると総計約480件の研究成果が集結する国内最大級の産学官マッチングイベントです。本学から出展を行っていませんが、国公立の単科の医科大学から旭川医科大、浜松医科大、滋賀医科大、札幌医科大、京都府立医科大が、奈良県内の大学から奈良女子大、奈良先端大がそれぞれ出展を行っていました。

Bio Japanは、バイオを核とした急速な技術革新に対応するため、大学・研究機関、ベンチャー企業、大手・中堅企業等が連携し、新製品・新事業開発を実現するオープンイノベーションを推進することを目指し、技術導入、共同開発、投資等の機会提供を図るために開催されており、今年で12回目を迎えます。今回の参加企業は、世界25カ国400社、出展大学・研究機関数は100機関にのぼります。本学はこちらにも出展を行っていませんが、国公立の単科の医科大学から福島県立医科大、京都府立医科大が、奈良県内の大学から奈良先端大がそれぞれ出展を行っていました。

また、Bio Japanにおいて関西TLO(株)がビジネスパートナーリングマッチングシステムを利用し、本学担当の五十川アソシエイトが出席して、国内外の製薬企業を含む39社と商談を行い、奈良医大・大学単独出願案件である**第一内科学の「血栓溶解酵素含有複合体」と住居医学の「アレルギーの検出キット及び検出方法」**の紹介を行いました。その場での商談成立には至らなかったものの、このような機会を利用してチャンネル数を増やしておく地道な努力の積み重ねが産学官連携に結びつくものとして今後も関西TLO(株)と共同で取り組んでいきたいと考えています。

来年度の予定は、イノベーションジャパンが東京国際フォーラムにおいて9/20(火)～9/22(木)の日程で、Bio Japanがパシフィコ横浜において10/5(水)～10/7(金)の日程で開催される予定です。企業との共同研究ではない大学単独のシーズをPRする絶好の機会です。出展を検討いただける研究者の方のご連絡をお待ちしています。(連絡先:産学連携推進係 内線2552)

UNITT2010 参加報告

9月24日・25日に電気通信大学で開催されましたUNITT2010(第7回産学連携実務者ネットワーク)に研究推進課より井村が参加しました。UNITTとは、大学知的財産本部やTLO(技術移転機関)で構成された一般社団法人大学技術移転協議会の最大イベントであり、米国のAUTM(米国大学技術管理者協会)に倣って、大学技術移転における諸課題について講師と会場が一体となって討議するセミナーとなっており、今回は、オープンイノベーションから人材育成まで多様なテーマが取り上げられ、計16セッションに全国から500人を超える産学連携関係者が集まりました。本学が知財マネジメントを委託している関西TLO(株)の坂井取締役が、「産学連携では若手人材はどう活躍すべきか・できるか」「産学連携成功のシナリオ トップランナーに聞く10年後の姿」と題してセッションを行いました。

以下、今回参加したセッションを報告いたします。

①「大学・研究者等にも容易な出願手続きについて」

研究競争が熾烈なライフサイエンス分野において出願日を確保する緊急回避的な方法として、論文をベースにして特許出願を行うための注意点などが議論されました。論文の早期発表と特許出願、権利化を両立させるためには、産学連携機能の強化、大学スタッフや弁理士による人的支援、普及活動、が重要になります。

②「オープンイノベーションと産学連携」

知財は活用されてこそ、社会のためになります。日本の大学は、異なるバックグラウンドの人を議論や意思決定の場に参加させる風土が不足しており、オープン型産学連携に消極的(受身)です。その理由としては、経験がない、キャリアにつながらない、といったことが挙げられます。大学は産学連携を評価する仕組みをつくることで知財活用をより推進することが出来ると考えられます。

③「日本版バイ・ドール運用ルール変更について(国からの資金で生まれた知財の取り扱いについて)」

日本版バイ・ドール制度とは、産業技術力強化法第19条のことで、国等の委託研究開発に関する知的財産権を受託者(民間企業や大学)に帰属させることを可能としたものです。平成21年4月の改正で、国等の委託研究開発の成果に係る特許権などを他人に移転し、または専用実施権を設定する場合にはあらかじめ国などの承認を受けることを受託者が約することが義務付けられました。

④「進化するCOIとアカデミア・ガバナンス」

医学研究におけるCOI(Conflict of Interest)が取り上げられ、①医学系大学、医療機関での研究実績(治験、臨床研究などについて)②学会、学術団体、学術雑誌での研究成果(ガイドライン策定などについて)の2か所でのCOIマネジメントが必要だという意見が出されました。組織がマネジメントを行うことで、産学連携活動における社会への必要な説明責任が果たされます。(9頁参照)

⑤「日本版NCURAは作れるのか?リサーチアドミニストレータ(RA)を考える」

研究機関において、単なる研究管理という意味ではなく、研究者と共に研究活動を円滑に実施するための業務全般を行うRAについて紹介がありました。研究開発に知見のある博士号取得者がRAとなれば、研究者と事務職員の間のコディネータとして、組織の特徴を活かす研究支援を行えると考えられます。

平成22年度中島佐一学術研究奨励賞の募集

募集期間	平成23年1月31日(月)まで	応募資格	<ul style="list-style-type: none"> ・奈良県立医科大学医学部医学科の若手教員(原則として申請時に45歳未満の者とする。) ・1教室につき1名(附属病院中央部門に勤務する教員については、その出身する教室に所属するものとみなす。)
募集要項	学内ホームページに募集要項及び申請書を掲載しています。 学内専用→研究推進課→研究助成金について→中島佐一学術研究奨励賞 http://top.naramed-u.ac.jp/jimu/kenkyu/nakajima.htm		
		受賞者数	原則2名
		副賞	研究奨励金を授与(平成21年度は、1人につき30万円)

平成22年度 外部資金獲得状況

(研究推進課)

(1) 厚生労働科学研究費補助金

①研究代表者

研究事業名	所属	職名	氏名	研究課題名
循環器疾患等生活習慣病対策総合研究事業	第一内科学	教授	斎藤 能彦	MRIを用いた脳卒中発症・再発予防のためのより有効な降圧治療のエビデンスの創出
がん臨床研究事業	泌尿器科学	教授	平尾 佳彦	がん診療ガイドラインの作成(新規・更新)と公開の維持およびその在り方に関する研究
障害者対策総合研究事業(精神障害分野)	精神医学	教授	岸本 年史	精神障害者に対する包括的禁煙対策の確立
障害者対策総合研究事業(感覚器障害分野)	耳鼻咽喉・頭頸部外科学	教授	細井 裕司	新しい音伝導ルートによる新補聴システムの開発-既存の気導補聴器が使用できない難聴者(耳漏のある耳、外耳道閉鎖症など)も使用可能な補聴器の開発-
難治性疾患克服研究事業	神経内科学	講師	杉江 和馬	自己食空胞性ミオパチーの診断基準確立と治療法開発に関する研究
食品の安心・安全確保推進研究事業	健康政策医学	教授	今村 知明	食品防衛の具体的な対策の確立と実行可能性の検証に関する研究
政策科学総合研究事業(政策科学推進研究事業)	健康政策医学	教授	今村 知明	医療における情報活用を行う上での適切な疾病分類に関する研究

②研究分担者

研究事業名	所属	職名	氏名	研究課題名	研究代表者名等
食品の安心・安全確保推進研究事業	地域健康医学	講師	佐伯 圭吾	国際食品規格の策定プロセスに関する研究	京都大学 医学部公衆衛生学教室 里村 一成
食品の安心・安全確保推進研究事業	健康政策医学	教授	今村 知明	国際食品規格の策定プロセスに関する研究	京都大学 医学部公衆衛生学教室 里村 一成
食品の安心・安全確保推進研究事業	健康政策医学	教授	今村 知明	第3世代バイオテクノロジー-応用食品等の安全性確保とリスクコミュニケーションに関する研究	国立医薬品食品衛生研究所 西島 正弘
地域医療基盤開発推進研究事業	健康政策医学	教授	今村 知明	専門医制度に関する研究	東京大学医学部附属病院 企画経営部 小池 創一
循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業	健康政策医学	教授	今村 知明	MRIを用いた脳卒中発症・再発予防のためのより有効な降圧治療のエビデンスの創出	奈良県立医科大学 第1内科学 斎藤 能彦
食品の安心・安全確保推進研究事業	健康政策医学	講師	赤羽 学	食品防衛の具体的な対策の確立と実行可能性の検証に関する研究	奈良県立医科大学 健康政策医学 今村 知明
食品の安心・安全確保推進研究事業	健康政策医学	講師	赤羽 学	食品を介したダイオキシン類等の人体への影響の把握と治療法の開発等に関する研究	九州大学 古江 増隆
政策科学総合研究事業(政策科学推進研究事業)	健康政策医学	助教	小川 俊夫	医療における情報活用を行う上での適切な疾病分類に関する研究	奈良県立医科大学 健康政策医学 今村 知明
難治性疾患克服研究事業	第一内科学	教授	斎藤 能彦	特発性心筋症に関する調査研究	国立循環器病センター 心臓血管内科 北風 政史
医療技術実用化総合研究事業	第二内科学	教授	木村 弘	慢性呼吸不全に対するグレリンの臨床応用	宮崎大学医学部 内科学講座 中里 雅光
循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業	第二内科学	教授	木村 弘	睡眠呼吸障害による生活習慣病に関する医療情報提供とその効果の評価	愛媛大学 大学院医学系研究科 谷川 武
難治性疾患克服研究事業	第二内科学	教授	木村 弘	呼吸不全に関する調査研究	京都大学 大学院医学研究科 三嶋理晃
循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業	第二内科学	教授	木村 弘	肥満残存高血圧合併睡眠時無呼吸患者に対する防風通聖散及び大紫胡湯の治療効果の比較と病態生理の解明	京都大学大学院医学研究科 呼吸管理睡眠制御学 陳 和夫
肝炎等克服緊急対策研究事業	第三内科学	教授	福井 博	血小板低値例へのインターフェロン治療法の確立を目指した基礎および臨床的研究	兵庫医科大学 西口 修平
難治性疾患克服研究事業	第三内科学	教授	福井 博	難治性の肝・胆道疾患に関する調査研究	鹿児島大学医学部総合研究科 消化器疾患・生活習慣病学 坪内 博仁
難治性疾患克服研究事業	神経内科学	教授	上野 聡	重症難病患者の地域医療体制の構築に関する研究	国立精神・神経医療研究センター 糸山 泰人
難治性疾患克服研究事業	神経内科学	教授	上野 聡	スモンに関する調査研究	国立病院機構鈴鹿病院 小長谷 正明
循環器疾患等生活習慣病対策総合研究事業	神経内科学	教授	上野 聡	MRIを用いた脳卒中発症・再発予防のためのより有効な降圧治療のエビデンスの創出	奈良県立医科大学 内科学第1講座 斎藤 能彦
難治性疾患克服研究事業	整形外科	教授	田中 康仁	ウエルナー症候群の病態把握、診療指針作成と新規治療法の開発を目的とした全国研究	千葉大学大学院 横手 幸太郎
成育疾患克服等次世代育成基盤	産婦人科学	教授	小林 浩	ライフスタイルの変化に伴う妊娠希望時の妊孕性減弱に対する病態解明、新規診断法と治療法開発のための研究	国立成育医療センター 生殖医学 齋藤 英和
エイズ対策研究事業	産婦人科学	博士研究員	喜多 恒和	HIV感染妊婦とその出生児の調査・解析および診療・支援体制の整備に関する総合的研究(H21-エイズ-一般-002)	国立病院機構仙台医療センター 婦人科 和田 裕一
エイズ対策研究事業	小児科学	教授	嶋 緑 倫	血友病とその治療に伴う合併症の克服に関する研究(第VIII、第IX因子製剤のインヒビター-発生要因に関する研究)	自治医科大学 坂田 洋一
難治性疾患克服研究事業	小児科学	教授	嶋 緑 倫	後天性血友病(XIII)の実態調査、発症機序の解明と治療方法の開発	山形大学医学部 分子病態学講座 一瀬 白帝
障害者対策総合研究事業	精神医学	教授	岸本 年史	自殺対策のための複合的介入法の開発に関する研究	国立精神神経医療研究センター 精神保健研究所精神薬理研究部 部長 山田 光彦
障害者対策総合研究事業(精神障害分野)	精神医学	教授	岸本 年史	統合失調症の未治療期間とその予後に関する疫学的研究	東邦大学 教授 水野 雅文
障害者対策総合研究事業(精神障害分野)	精神医学	教授	岸本 年史	治療抵抗性統合失調症に対する治療戦略のためのデータベース構築に関する研究	群馬大学 精神科 三國 雅彦
難治性疾患克服研究事業	皮膚科学	教授	浅田 秀夫	重症多形滲出性紅斑に関する調査研究	杏林大学 塩原 哲夫
難治性疾患克服研究事業	皮膚科学	講師	桑原 理充	肥厚性皮膚骨膜炎における遺伝子診断と生化学的検査を踏まえた新しい病型分類の提言と既存治療法の再評価に関する研究	国立成育医療センター 新聞 寛徳
がん臨床研究事業	泌尿器科学	教授	平尾 佳彦	早期前立腺がんにおける根治術後の再発に対する標準的治療法の確立に関する研究	九州大学 医学部泌尿器科 内藤 誠二

研究事業名	所属	職名	氏名	研究課題名	研究代表者名等
がん臨床研究事業	泌尿器科学	教授	平尾 佳彦	高悪性度筋層非浸潤癌に対する経尿道的膀胱腫瘍切除後の治療方針の確立に関する研究	札幌医科大学泌尿器科 塚本 泰司
がん臨床研究事業	泌尿器科学	教授	平尾 佳彦	がん診療ガイドラインの作成(新規・更新)と公開の維持およびその在り方に関する研究	札幌医科大学 外科学第一講座 平田 公一
障害者対策総合研究事業(感覚器障害分野)	耳鼻咽喉・頭頸部外科学	講師	阪口 剛史	新しい音伝導ルートによる新補聴システムの開発-既存の気導補聴器が使用できない難聴者(耳漏のある耳、外耳道閉鎖症など)も使用可能な補聴器の開発-	奈良県立医科大学 耳鼻咽喉科学 細井 裕司
障害者対策総合研究事業(感覚器障害分野)	耳鼻咽喉・頭頸部外科学	講師	西村 忠己	新しい音伝導ルートによる新補聴システムの開発-既存の気導補聴器が使用できない難聴者(耳漏のある耳、外耳道閉鎖症など)も使用可能な補聴器の開発-	奈良県立医科大学 耳鼻咽喉科学 細井 裕司
循環器疾患等生活習慣病対策総合研究事業	放射線医学	教授	吉川 公彦	MRIを用いた脳卒中発症・再発予防のためのより有効な降圧治療のエビデンスの創出	奈良県立医科大学 内科学第1講座 斎藤 能彦
難治性疾患克服研究事業	輸血部	教授	藤村 吉博	血液凝固異常症に関する調査研究	慶応義塾大学 村田 満
医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業	輸血部	准教授	松本 雅則	輸血用血液製剤及び血漿成分製剤投与時の効果的インフォームド・コンセントの実施に関する研究	虎の門病院 血液内科 牧野 茂義
医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業	周産期医療センター	教授	高橋 幸博	新生児輸血療法の安全性、有効性、効率性の向上に関する研究	東京慈恵会医科大学 輸血部 星 順隆
エイズ対策研究事業	感染症センター	助教	宇野 健司	日和見感染症の診断/治療およびそれを端緒とするHIV感染者の早期発見に関する研究	長崎大学医学部歯学部附属病院 感染症制御教育センター 安岡 彰
障害保健福祉総合研究事業	看護学 人間発達学	教授	飯田 順三	トレット症候群の治療や支援の実態の把握と普及啓発に関する研究	東京大学 医学部附属病院 金生 由紀子

(2) 独立行政法人 国立がん研究センター

研究事業名	所属	職名	氏名	研究課題名	主任研究者名等
がん研究開発費事業	放射線医学	講師	穴井 洋	難治がん対策推進のための総合的研究	国立がんセンター中央病院 藤原 康弘
がん研究開発費事業	放射線医学	講師	穴井 洋	がん治療におけるIVRの技術向上と標準化に関する研究	国立がんセンター中央病院 竹内 義人
がん研究開発費事業	放射線医学	講師	穴井 洋	進行肝胆膵がんの治療法の開発に関する研究	国立がんセンター中央病院 奥坂 拓志

(3) 独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター

研究事業名	所属	職名	氏名	研究課題名	主任研究者名等
精神・神経疾患研究開発費事業	看護学 発達学	教授	飯田 順三	精神科医療における発達精神医学的支援に関する研究	国立精神神経センター 精神保健研究所 神尾陽子
精神・神経疾患研究開発費事業	看護学 発達学	教授	飯田 順三	児童思春期強迫性障害(OCD)診断・治療ガイドラインの検証及び拡充に関する研究	東京大学 医学部附属病院 金生 由紀子

(4) 独立行政法人 国立国際医療センター

研究事業名	所属	職名	氏名	研究課題名	主任研究者名等
国際医療研究開発費事業	看護学 発達学	教授	飯田 順三	注意欠如・多動性障害-ADHD-の客観的指標に基づく診断・治療指針の作成に関する研究	国立国際医療センター 国府台病院 齊藤 万比古

(5) 独立行政法人 国立成育医療研究センター

研究事業名	所属	職名	氏名	研究課題名	主任研究者名等
成育医療研究開発費事業	小児科学	教授	嶋 緑倫	小児出血・血栓性疾患診療の向上と均てん化を目的とした治療管理マニュアルの作成と教育研修法の開発	独立行政法人 国立成育医療研究センター 石黒 精

(6) 独立行政法人 国立循環器病研究センター

研究事業名	所属	職名	氏名	研究課題名	主任研究者名等
循環器病研究開発費事業	第一内科学	教授	斎藤 能彦	重症循環器疾患に対する生理活性ペプチドのトランスレシヨナルリサーチ	独立行政法人 国立循環器病研究センター 寒川 賢治

(7) 独立行政法人 医薬基盤研究所

研究事業名	所属	職名	氏名	研究課題名	主任研究者名等
保険医療分野における基礎研究推進事業	皮膚科学	教授	浅田 秀夫	帯状疱疹ワクチン開発のための疫学研究	(独)医薬基盤研究所 理事長 山西 弘一

(8) 総務省

研究事業名	所属	職名	氏名	研究課題名	主任研究者名等
戦略的情報通信研究開発推進制度(SCOPE)	耳鼻咽喉・頭頸部外科学	教授	細井 裕司	音情景分解に基づく音メディア・ユニバーサル・コミュニケーション・システムの研究開発	

(9) 経済産業省

研究事業名	所属	職名	氏名	研究課題名	主任研究者名等
戦略的基盤技術高度化支援事業(一般枠)	泌尿器科学	教授	平尾 佳彦	MEMS技術を用いた癌診断用カートリッジ型ハイスルーブット光学尿中細胞診断装置の開発	

(10) 内閣府

研究事業名	所属	職名	氏名	研究課題名	主任研究者名等
食品健康影響評価技術研究	健康政策医学	教授	今村 知明	食品健康被害に伴う社会的過剰反応の確認、予測手法の確立とこれを最小限に抑えるためのリスクコミュニケーション手法の確立	

(11) 独立行政法人 科学技術振興機構

研究事業名	所属	職名	氏名	研究課題名	主任研究者名等
戦略的創造研究推進事業	物理学	講師	高木 拓明	細胞における確率的分子情報処理の理論研究	
研究成果最適展開支援事業 A-STEP	第一内科学	准教授	上村 史朗	末梢血遺伝子発現プロファイルを利用した慢性腎臓病における動脈硬化進展予測法	

研究事業名	所属	職名	氏名	研究課題名
研究成果最適展開支援事業 A-STEP	第一内科学	講師	岩野 正之	急速進行性糸球体腎炎の早期診断に有用な新規バイオマーカーの開発
研究成果最適展開支援事業 A-STEP	病理病態学	講師	島田 啓司	癌細胞由来転移促進因子HMGB1の血液吸着による除去
研究成果最適展開支援事業 A-STEP	分子病理学	教授	國安 弘基	活性酸素種に着目した非侵襲的膀胱癌診断システムの開発

(12) 財団法人 関西文化学術研究都市推進機構

研究事業名	所属	職名	氏名	研究課題名
都市エリア産学官連携促進事業	泌尿器科学	教授	平尾 佳彦	泌尿器計測モジュールの開発
	産婦人科学	教授	小林 浩	妊婦見守りモジュールの開発

(13) 独立行政法人 医薬基盤研究所

研究事業名	所属	職名	氏名	研究課題名
保健医療分野における基礎研究推進事業	第一内科学	教授	斎藤 能彦	ワタナベ高脂血症ウサギを用いたインテリジェントナノDDSおよび超音波の不安定プラークに対する影響の確認、ウサギ動脈血栓閉塞モデルおよびブタ急性心筋梗塞モデルにおけるインテリジェントナノDDSと超音波併用による血栓溶解効果の確認に関する研究
	皮膚科学	教授	浅田 秀夫	経皮免疫製剤の臨床研究
	病理病態学	教授	小西 登	PCA-I siRNAの腫瘍に対する抗腫瘍作用機序解析
	消化器・総合外科学	教授	中島 祥介	

(14) 独立行政法人 宇宙航空研究開発機構

研究事業名	所属	職名	氏名	研究課題名
宇宙環境利用科学	放射線腫瘍医学	特任教授	大西 武雄	宇宙ステーションにおける宇宙放射線の生物影響研究

(15) 奈良県

研究事業名	所属	職名	氏名	研究課題名
奈良県自殺対策に関わる高度人材養成事業	精神医学	教授	岸本 年史	自殺未遂者等に心理教育を実施し、退院後に問題解決を図るために適切な社会資源と連携するケースマネージャーを養成し、再発を防止する

(16) その他 財団法人等

団体名等	所属	職名	氏名	研究課題名
財団法人上原記念生命科学財団	循環器システム医科学	教授	中川 修	心血管系の疾患メカニズムにおける転写調節因子の意義
財団法人ユニバール財団	産婦人科	教授	小林 浩	ITを用いた双方向システムによる高齢者の住宅支援
財団法人日本消化器病学会	消化器・総合外科学	講師	庄 雅之	膵臓癌における癌免疫回避機構の解明と新規癌治療法の開発
財団法人中山がん研究所	消化器・総合外科学	講師	庄 雅之	難治性消化器癌におけるメモリーT細胞の機能解明と新規癌治療戦略の開発
財団法人花王芸術・科学財団	脳神経システム医科学	助教	高橋 弘雄	嗅覚サブシステムの形成・動作機構の解明
公益財団法人中富健康科学振興財団	循環器システム医科学	助教	林 寿来	新しい筋再生・増殖調節因子の骨格筋疾患における意義の研究
財団法人日本応用酵素協会	脳神経システム医科学	教授	坪井 昭夫	嗅覚系においてCO2センシングに関与する酵素の機能解析
バクスターバイオサイエンス学術研究基金(BHF)	小児科学	講師	柴田 優	肝再生刺激下で行う細胞移植療法-血友病Aマウスモデルにおける基礎的検討
Bayer HealthCare Pharmaceuticals	血栓制御医学	講師	松井 英人	Establishment of Novel Stem Cell-Based Therapy for Immune Tolerance Induction in Hemophilia A
財団法人社会安全研究財団	母性看護・助産学	講師	泉川 孝子	DV被害者の早期発見及びその予防のための教育プログラム開発—看護職に視点を置いて—
財団法人阪本精神病理学研究所	精神医学	助教	澤田 将幸	客観的指標を用いた統合失調症と広汎性発達障害の鑑別
財団法人武田科学振興財団	循環器システム医科学	助教	林 寿来	血管新生を制御する新しい転写調節機構の研究
社団法人日本損害保険協会	脳神経外科学	講師	朴 永録	最重症急性硬膜下血腫に対する新たな治療戦略ER 緊急穿頭術による血腫除去の治療成績
財団法人三井生命厚生事業団	産婦人科学	助教	成瀬 勝彦	アディポネクチンを指標とした妊娠糖尿病および妊娠高血圧症候群の早期予知と介入効果—インスリン抵抗性周産期疾患の減少を目指して—
財団法人浦上食品・食文化振興財団	脳神経システム医科学	教授	坪井 昭夫	食において匂いの快・不快を誘起する脳内神経回路の解明
財団法人コスメトロジー研究振興財団	脳神経システム医科学	助教	吉原 誠一	香りによる快・不快の感情が新生神経細胞の発達に与える影響の研究
公益財団法人住友財団	精神医学	助教	深見 伸一	ヒト疾患特異的人工多能性幹細胞を用いた化学物質リスク評価系の確立
公益財団法人三井住友海上福祉財団	住居医学	助教	大林 賢史	高齢者の光環境がメラトニン分泌および夜間睡眠・血圧変動に及ぼす影響に関する横断研究
財団法人万有生命科学振興国際交流財団	血圧制御学	講師	染川 智	右心不全に関与する新規遺伝子の同定と機能解析
財団法人先進医薬研究振興財団	第二解剖学	教授	和中 明生	脳微小循環におけるADAMTS13の発現と機能—ペナンブラ血流の回復を目指して—
財団法人日本宇宙フォーラム	第一生理学	講師	和田 佳郎	長期宇宙滞在中の傾き感覚の形成に対する視覚と頸部深部感覚の関与
財団法人先進医薬研究振興財団	第一内科学	助教	竹田 征治	PHD2によるF β -1を介した慢性腎不全合併動脈硬化症の制御機構の解明

小児センターの設立にあたって

小児センター長 嶋 緑倫

このたび、小児科病棟はA棟7階への移転に伴い小児センターとして新たに機能することになりました。小児科の領域はもともと広範囲であり、これまでも悪性腫瘍や小児循環器疾患の治療は小児外科、脳神経外科、心臓外科、整形外科、腫瘍放射線科など各科の先生方と連携して診療を実施してきました。さらに、奈良医大は奈良県下唯一の小児3次医療施設として各病院と連携しながら、奈良県の小児医療を担ってきました。



京都市立芸術大学のみなさんと小児センターで

年々、小児医療のレベルも高度になってきており、ハイレベルな小児医療を実践していくためには小児医療がある程度集約化される必要があります。したがって、今回の小児センターの設立はまさにタイムリーであると考えています。運営的には現状の小児内科疾患の治療を基本としながら、副センター長である小児外科担当の金廣裕道病院教授と連携しながら、スタッフ全員一丸となって努力していく所存です。

なお、このたびの小児センター設立にあたって、京都市立芸術大学から7名の学生の皆さんがボランティアで小児病棟の壁や天井にたくさんの絵を描いてくれました。おかげさまで病棟は見違えるほど明るくなりました。思いがけないプレゼントに入院している子どもたちや付き添っているご家族は大喜びです。スタッフも皆感謝しております。

この場をお借りしてお礼を申し上げます。

乳腺外科の外来が新設されました ～女性のプライバシーを守ります～



消化器外科・小児外科・乳腺外科 中村 卓

16人に1人、これは一生のうち日本人女性が乳がん罹患する確率です。今や、日本人女性のがん罹患率の第一位は乳がんであり、当院でも乳がん患者さんは増加の一途をたどっております。

従来は消化器外科・小児外科・乳腺外科として水曜日のみ診察を行っておりましたが、この度、平成23年1月から連日受診可能な乳腺外科として専用の外来診察室を設けることになりました。

このことにより、さらに女性のプライバシーに配慮された環境で診療を行うことが可能となります（もちろん、男性乳がん患者さんの受け入れも従来通り行ってまいります）。

乳がん治療は最新のエビデンスを取り入れ、常に進化しています。

手術治療のみならず、薬物治療、放射線治療なしには乳がん治療は成り立ちません。また、看護師、薬剤師、診療放射線技師、理学療法士、栄養士、ソーシャルワーカー、事務職員など、病院内のスタッフの協力があって、初めて患者さんのニーズを満たす最善の治療を提供できるものと確信しています。

これからも都道府県がん診療連携拠点病院として世界標準の治療をいち早く取り入れていくと同時に、患者さん中心に安心・安全、そして満足が得られる乳がん治療を提供してまいります。

今後とも、皆様のご協力、ご指導賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

～外来エレベーターを設置～

このたび、整形外科外来（2階：産婦人科外来）の横に、多くの患者さんから要望があった1階と2階を結ぶエレベーターが完成し、1月4日から稼働しました。

以前は、階段、又は、A棟エレベーターを利用していただいていたのですが、このエレベーターの設置により、1階総合受付から2階外来へスムーズな移動が可能になりました。今後、たくさんの患者さんに利用していただければ幸いです。



活躍する認定看護師たち

附属病院では、13名の認定看護師（日本看護協会認定）が、10の分野で活躍しています。今年度、新たに認定されたメンバーを紹介します。

がん放射線療法看護認定看護師

池田 紗弥佳（いけだ さやか）（外来2階 放射線治療・核医学科）



私は放射線治療・核医学科外来で勤務しています。平成22年7月に、がん放射線療法認定看護師資格を取得しました。

がんで、放射線治療を受ける患者数は増加の一途をたどっており、背景に様々な問題を抱える方が大勢おられます。そのような方々が、少しでも安心して放射線治療を継続し、最大限の治療効果を得ることができるよう、放射線療法の原理に基づき治療経過を予測し、看護介入をアセスメント（事前評価）し、実践しています。また、多くの情報が氾濫するなか、迷いや不安を抱える方々の意思決定を支えるよう接しています。

「がん放射線療法看護」は今年度から新しく認定された分野で、日々、諸先輩方のご指導を受けながら、この分野の看護を発展させていくよう頑張っています。また、他の職種のスタッフと協働して、患者さんが笑顔になれる放射線療法を目指し、チームとして日々患者さんに関わっています。

放射線療法に関する疑問や相談をお受けいたしますのでお気軽にお声をかけてください。

救急看護認定看護師

伊藤 憲子（いとう のりこ）（高度救命救急センターICU）



救急医療とは、年齢や性別、診療科を問わず、不慮の事故による外傷や熱傷、脳卒中や心筋梗塞などの突発的発症や慢性疾患の急性増悪、各種中毒など多種多様な疾患・外傷を有した患者に対して、初期段階に実施される医療です。また、救急医療が行なわれる場所はプレホスピタルから一般病棟まで、さらには災害時を含む幅広い範囲が対象となります。ここで展開される救急医療の質が、その後の治療成績を左右すると言っても過言ではありません。

このような場面で救急看護認定看護師の役割は、的確な判断に基づいた確実な救命技術の実践や指導を行なうこと、危機状況にある患者および家族への精神面の看護援助を行なうことです。また、救急現場で重要となるチーム医療が円滑に行えるように、他職種間の調整役となることです。

現在は、所属する高度救命救急センターに搬送されてくる患者さんやご家族に対して、初療や救命救急センターICUで、生命の危機的状況から脱することができるように、また突然の出来事によるパニックに陥らないよう看護実践をしています。

今後は、院内の救急看護、さらには院内救急システムの質の向上について、看護スタッフや他職種とともに取り組んでいきたいと考えています。

溝上 大輔（みぞかみ だいすけ）（高度救命救急センターHCU）



みなさん、はじめまして。今年度新たに救急看護認定看護師になりました溝上大輔といたします。男性の認定看護師としては附属病院で3人目となり、周囲の方々のご支援とご助力のおかげで無事試験にも合格し、今年度より救急看護認定看護師として活動を始めました。

当院の高度救命救急センターは奈良県最大の3次救急医療施設であり、奈良県内の重症救急患者さんが搬送・入院されています。救急看護は特有の病態や疾患で、かつ特殊な状況下にある患者や家族に対して全人的な看護を行う領域で、日々急性期における患者・家族の看護に奮闘しています。救命救急におけるありとあらゆる疾患が搬送されるため、緊急度・重症度を判断・対応する能力と幅広い知識を求められており、日々知識と技術の向上に追われています。

現在、高度救命救急センター内でスタッフとして救急看護の質の向上に努めながら、院内の看護部災害対策委員会の一員として災害対策に取り組んでいます。また院内・外の依頼に応え、救急看護認定看護師としての知識を講義・指導させていただき、少しずつ活動の幅を広げているところです。今後皆さんと関わることがあると思いますが、そのときは温かく迎えていただけたらうれしく思います。

益々のご活躍を ～金廣先生が「病院教授」に～



称号付与式にて（左から吉岡学長、金廣病院教授、中島教授）

平成23年1月1日付けで小児センター副センター長である金廣裕道先生（消化器・総合外科学）が病院教授になりました。

今年度創設されたこの制度は「特に診療面で優れた実績が認められる者に対し称号を付与する」ものです。

小児センター 病院教授 金廣 裕道 先生

～おめでとうございます～

平成23年度医学教育等関係業務功労者表彰

大学における医学についての教育、研究、患者診療等に関する業務について、特に顕著な功績があったとして、11月30日に次の二人が文部科学大臣から表彰されました。

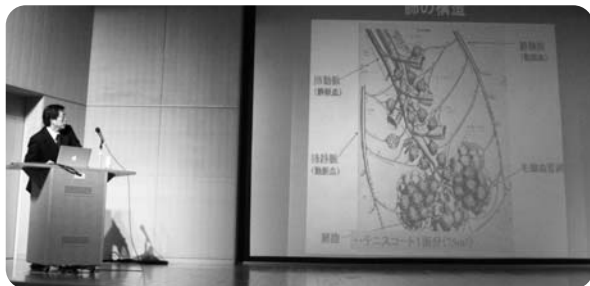


浅見 美代さん(栄養管理部)



匠原 松代さん(看護部)

「共催」制度新設 — 県医師会と公開講座を共催 —



講演する木村教授

今年度、これまでの「後援」名義の使用条件に加え、新たに「共催」制度が設けられました。この制度は、開催する行事等に対して当法人（公立大学法人奈良県立医科大学）の参加体制が明確（人的参画、場所提供、経費負担等を行うなど）であることを条件としており、対象事業は役員会で決定します。

昨年12月12日（日）には、第1回目の行事として社団法人奈良県医師会との共催による公開講座を奈良県医師会館において開催し、人的参画として第二内科学木村弘教授が講演を行いました。

共催名義の使用については、下記URLをご覧ください（学内専用）。

http://top.naramed-u.ac.jp/jimu/soumuka/03soumu/kyousai_meigi.pdf

平成23年度 奈良県立医科大学附属病院

医師臨床研修マッチング結果について

臨床研修センター長 福井 博（臨床研修センター 内線 2395）

（ ）は昨年度数値

プログラムの名称	臨床研修プログラムA	臨床研修プログラムB	臨床研修プログラムC1	臨床研修プログラムC2	計(人)	マッチ率 (マッチ者/定員)
プログラムの内容	基本的に医大附属だけでローテートするプログラム	医大附属病院と協力型病院をローテートするプログラム	産婦人科医を目指すための特別プログラム	小児科医を目指すための特別プログラム		自学占有率 (本学学生/マッチ者)
募集定員	40 (38)	15 (15)	2 (2)	2 (2)	59 (57)	
マッチング者数	30 (37)	12 (11)	2 (1)	0 (2)	44 (51)	74.5% (89.4%)
うち本学学生	21 (33)	11 (10)	1 (1)	0 (2)	33 (46)	75.0% (90.1%)

平成23年4月からの臨床研修医の採用を決めるための「医師臨床研修マッチング結果」が昨年10月28日（木）に発表されました。本院のマッチング結果は募集定員59人に対して、マッチング者数は44人となり、マッチング率は74.5%でした。奈良県全体としての今回のマッチング者数は76人となり、総定員101名に対するマッチング率は75.2%、全国順位は16位でした。

参考 都道府県別の結果 奈良県	今回 (H22.10.28発表結果)				前回 (H21.10.29発表結果)			
	募集定員	マッチ者数	マッチ率	全国順位	募集定員	マッチ者数	マッチ率	全国順位
	101	76	75.2%	16位	97	80	82.5%	11位

役員会及び教育研究審議会の報告

第23回 役員会（10月6日）

- 1 教育研究審議会予定案件を承認
- (1) 教員の人事について
- (2) 現寄生虫学講座の教授選考について
- (3) 授業料の減免制度について
- (4) 研究指導教員等の目安について
- (5) 研究用放射線障害予防規程の改正について
- (6) 講座・教員研究費の下半期の配分について
- 2 財務状況（8月末現在）を報告
- 3 平成23年度医師臨床研修マッチングの状況を報告
- 4 共催名義の使用についての内規を制定、10月6日付けで施行
- 5 職員採用試験（電気職・事務職）の合格者を決定

第10回 教育研究審議会（10月7日）

- 1 教員の10月31日付け退職予定、11月1日付け、平成23年3月1日付け採用を承認
- 2 現寄生虫学講座の教授選考にかかる基本方針を答申、医学科教授選考会議に提案
- 3 研究用放射線障害予防規程の一部改正を承認し、10月7日付けで施行
- 4 講座・教員研究費の下半期の配分を承認
- 5 授業料の減免制度の創設を承認、要綱は4月1日付けで施行
- 6 看護学科の大学院修士課程について承認
- 7 研究指導教員等の目安を承認し、10月7日付けで適用
- 8 平成22年度病室環境研究の交付決定を報告

第24回 役員会（10月13日）

- 1 県において人事委員会による給与勧告等がなされた旨報告
- 2 県において10月7日付けで有限責任監査法人トーマツが会計監査人として選任されたことを報告
- 3 職員採用試験（臨床工学技士）の合格者を決定

第25回 役員会（10月20日）

- 1 平成23年度予算編成方針を策定

第26回 役員会（10月27日）

- 1 教育研究審議会、経営審議会予定案件を承認
- (1) 平成22年度年度計画の取り組み状況（4～9月）について
- (2) 平成23年度年度計画の策定について
- 2 教育研究審議会予定案件を承認
- (1) 寄附講座の設置について
- (2) 教育研究振興基金の支出について
- 3 平成23年度医学部入学定員増についての文部科学省通知を報告
- 4 職員採用試験（臨床検査技師、診療放射線技師及び看護職員）の合格者を決定

第27回 役員会（11月1日）

- 1 平成23年度医師臨床研修マッチング結果を報告

第11回 教育研究審議会（11月4日）

- 1 平成23年度年度計画策定作業日程等を承認
- 2 寄附講座「(仮称)人工関節・骨軟骨再生医学講座」の設置を承認
- 3 平成22年度年度計画の取り組み状況を報告
- 4 教育研究振興基金による生体シミュレーターの購入を報告
- 5 平成23年度医学部入学定員増には対応しないことを報告
- 6 平成23年度医師臨床研修マッチング結果を報告

第28回 役員会（11月10日）

- 1 ゲストハウス使用料の見直し（1000円→1500円/日）を承認し、平成23年1月1日以降の入居者から適用することを決定
- 2 募集人員に満たない職種（臨床工学技士）の再募集、建築職員の新規募集等を承認し、職員採用試験の実施を決定
- 3 平成22年度決算見込（9月末現在）を報告

第29回 役員会（11月17日）

- 1 附属病院規程の一部改正、小児センター運営委員会規程及びメディカルバスセンター運営委員会規程の制定を承認し、いずれも12月1日から施行
- 2 小児センター運営委員会委員及びメディカルバスセンター運営委員会委員について、いずれも12月1日付けで選任
- 3 本学医学科卒業予定者の臨床研修マッチング結果を報告

第30回 役員会（11月24日）

- 1 看護職員採用試験の合格者を決定

第31回 役員会（12月1日）

- 1 職員給与規程の一部改正を承認し、12月1日付けで施行
- 2 役員報酬規程の一部改正を承認し、12月1日付けで施行
- 3 職員（電気職）募集の実施を決定
- 4 臨床系教員の勤務実態調査の実施を決定
- 5 教育研究審議会予定案件を承認
- (1) 学則の一部改正について
- (2) 同志社女子大学との単位互換に関する申合せの締結について
- (3) 看護学科3年次編入学生規程の一部改正について

第32回 役員会（12月8日）

- 1 教育研究審議会予定案件を承認
- (1) 教員の人事について
- (2) 病院教授の称号付与について
- 2 財務状況（10月末現在）を報告
- 3 福建医科大学との学術交流協定に基づく研究者の派遣を報告
- 4 産科医学生支援奨学生の推薦者の決定を報告

第12回 教育研究審議会（12月9日）

- 1 学則の一部改正を承認、平成23年4月1日付けで施行
- 2 同志社女子大学との単位互換に関する申合せの締結を承認
- 3 看護学科3年次編入学生規程の一部改正を承認、平成23年4月1日付けで施行、平成25年度からの編入生に適用
- 4 教員の12月31日付け、平成23年3月31日付け退職、同1月1日付け昇任及び採用、同4月1日付け採用を承認
- 5 病院教授の選考について承認し、結果を役員会へ報告
- 6 平成22年度決算見込を報告
- 7 福建医科大学との学術交流協定に基づく研究者の派遣を報告
- 8 ゲストハウス使用料の見直しを報告
- 9 産科医学生支援奨学生の推薦者の決定を報告

第33回 役員会（12月15日）

- 1 病院教授として小児センター副センター長金廣裕道氏を決定、1月1日付けで称号付与
- 2 教育研究審議会予定案件を承認
- (1) 発明届について

第34回 役員会（12月22日）

- 1 職員採用試験（理学療法士、作業療法士、言語聴覚士及び管理栄養士）の実施を承認
- 2 看護職員採用試験の合格者を決定

公開講座『くらしと医学』開催のお知らせ

下記のとおり開催します。皆様お誘い合わせの上、ぜひご聴講ください。

日時:平成23年2月19日(土) 13時～15時30分

場所:奈良県文化会館国際ホール(奈良市登大路町)

演者:寄生虫学石坂教授、中央臨床検査部岡本教授、臨床病態医学濱田教授

<http://www.naramed-u.ac.jp/~aff/koukaikouza/>

「メディア掲載情報」をお寄せください～学報で紹介します～

新聞・雑誌・テレビ等マスコミの取材、テレビ出演、記事を掲載された教職員・学生を、この「学報」紙面で紹介します。

掲載者	掲載メディア	掲載概要
小山 文一 講師 (消化器・総合外科学)	読売新聞 朝刊 10月 3日(日)	「病院の実力」大腸がん特集において、附属病院の手術件数とともに、小山講師の「早期発見のために検診をしっかり受けてほしい」とのコメント等が掲載されました。
羽竹 勝彦 教授 (法医学)	読売新聞 朝刊 10月 5日(火)	県内での解剖件数も4年前から年100件を越えるペースとなり、9月末ですでに101件、そのほぼすべてを手がける羽竹教授の「解剖は遺体との対話」とのコメント等が掲載されました。
長谷川 正俊 教授 (放射線腫瘍医学)	朝日新聞 朝刊 10月21日(木)	日本癌学会市民公開講座の特集において、長谷川教授の「がんをねらいうちする放射線治療」と題した、がん放射線治療の最新事情の解説が掲載されました。
大崎 茂芳 教授 (化学)	NHK奈良放送局 ならナビ 11月15日(月)	「この人に訊く「クモの糸がバイオリンの弦に?!)」と題して、大崎教授が、さまざまな試行錯誤の過程や、大きな可能性を秘めるクモの糸に対する思いを話されました。
A棟7階 小児センター	NHK奈良放送局 ならナビ 11月16日(火)	京都市立芸術大学学生ボランティアHoppy7のみなさんによる小児センター壁面へのペイント装飾の様子が放映されました。(16頁に関連記事)
細井 裕司 教授 (耳鼻咽喉・頭頸部外科学)	NHK教育テレビ 『今日の健康』 12月20日他	「耳が聞こえにくいと感じたら」をテーマに、細井教授から3回にわたり、聞こえに関する解説と質疑応答が放映されました。
緩和ケア・精神科 各外来、腫瘍センター	日本テレビ系 『NEWS ZERO』 12月23日(木)	「働き世代のがん患者を支える"がんと心"」と題して、附属病院受診中の女性がん患者さんの診察及び治療概要などが紹介されました。
消化器・総合外科学	NHK教育テレビ 『サイエンスZERO』 12月25日(土)	2010年に注目を集めた様々な科学ニュースを専門家の目線から振り返る特集の中で、消化器・総合外科学講座が発表した「iPS細胞から世界初の臓器作製」が紹介されました。

このコーナー「メディア掲載情報」は、皆さんからの提供情報に基づき作成します。自薦、他薦を問いません。

【情報提供先】ファックス等の方法により、右記へお知らせください。法人企画部 総務課 総務係 (内線2206) FAX 25-7657
くわしくは、http://top.naramed-u.ac.jp/jimu/soumuka/03soumu/media_joho.pdf (学内専用)

学報バックナンバーはWebサイト上でもご覧いただけます (<http://www.naramed-u.ac.jp/gakuho.htm>)

下ツ道

(編集後記)

新年あけましておめでとうございます。

年末年始はこの冬一番の冷え込みとなり、年明けの初出勤では校舎も冷えきっていたためか暖房がなかなか効かず厳しい一日となりました。

しかし、仕事始め式では理事長から大学が黒字化へ向かっているとのうれしい話があり、奈良医大もようやく盛り返してきたのだと感じられました。寒さに負けず頑張っていきたいと思えます。本年もよろしくお願いいたします。

いと思えます。本年もよろしくお願いいたします。

掲載希望の記事等については、各編集委員までお知らせください。

○今村 知明 (健康政策医学)
藤本 雅文 (物 理 学)
笹平 智則 (分 子 病 理 学)
植村 正人 (内 科 学 第 三)
坂東 春美 (地 域 看 護 学)
錦 三恵子 (看 護 部)
岡 眞啓 (研 究 推 進 課)
鷹本 純史 (学 務 課)
奥田 稔 (病 院 管 理 課)
鷹野 寛 (総 務 課)
(○印は編集委員長)